

ひきこもり、を理解しよう。パート5

成功裏に

プラットフォームKoka\終わる

11/25

地域のまなざしを変えるきっかけに



①100名を超える山下耕平氏講演会 ②ちよこプラカフェメンバー ③小さな図書館Droppe
④⑤⑧作品展示コーナー ⑥啓発冊子ひとりとなり ⑦世津田スズさん自殺予防啓発コーナー

地域共生フォーラムプラットフォーム「ひきこもり」がまちづくり活動センターまるーむで開催されました。
フォーラムは講演の他に、世津田スズさんの自殺予防啓発コーナーや小さな図書館紹介、支援者グループや当事者の作品展示等のブースがあり、来場者が「地域共生社会」に興味関心を抱き、新たな出会いの入口となりました。

協働開催 KOKA-COMACHI マルシェ

起業して間もない女性起業家の方たちが、パンやお菓子、お金や身体の相談会などを開催。お子様連れなどたくさんの方が来場され賑わいました。



コミュニティコーピング体験会

11/7 地域の孤立孤独を防ごう

甲賀市民生委員生活福祉部会のみなさん、約70名の方を対象に、コミュニティコーピング体験会を開催しました。ゲーム性も高く、会場は大盛り上がり。参加者からは、「自分たち民生委員だけでなく、地域の人の中に、担い手やつなげる人がいるんだな〜」「社会とのつながりの 処方、という考え方がおもしろい」「自分の地域でもしてほしい」との感想や意見が出されていて、楽しみながら、孤立予防に向けて考えていただく、機会となりました。



傾聴・処方・つながりをシュレーション

民生委員生活福祉部会

講演 山下耕平氏
「不登校・ひきこもりって何？」
山下耕平氏
フリースクール・フォロ副代表理事

「不登校」や「ひきこもり」を誰が問題にしてきたのか？山下さんは根源的な問いを投げかけています。「どちらか親からの相談を受け、精神科医など専門家が名付けてきた言葉で、本人たちが自らその言葉を受つたわけではなく、ひきこもりは、他人事のように思いがちですが、山下さんはそれを「はつかり否定します。一家以外の場所が学校か会社しかなく、それを失った時に孤立し、それが今の日本です。それは誰にでも起こる可能性があります。」



こちらから講演の動画が視聴できます

不登校・ひきこもりは、ある特定の人たちの問題ではなく、私たちの問題です。そして当事者を追い詰めているのは、社会のまなざしなのです。山下さんは長年、当事者と共に生きてこられた立場から、本人の思いをこう代弁されます。「親や周囲の人間は本人を変えようと考えます。しかし、本人は今苦しいことをただ受け止めてほしいんです。一問題を本人や家族に押し付けて自己責任で片づけるのではなく、社会の問題として考える、その視点(まなざし)の転換を共有出来た講演会でした。」

懐かしい未来新聞

発行：甲賀市
地域共生社会推進課
連絡先 内線1356
0748-69-2155

本号の紙面
★共生フォーラム開催しました
★社会福祉法人連携研修会
★コミュニティコーピング体験会
★重層物語 シーズン4の2編

11/28 社会福祉法人連携研修会

福祉の領域を超え、暮らし全体へのアプローチ

人口減少社会を前に、地域の社会福祉法人として何ができるかを考える機会として開催し、講師には、アミタホールディングス株式会社(官民交流にて厚労省から派遣中)野崎伸一氏をお招きしました。
「地域共生社会」のコンセプトづくりから重層的支援体制整備事業創設などに深く関わってこられた野崎氏は、次のように話されました。
「これまでは、属性ごとの社会保障は制度や法律などのメインシステムであったが、それだけでは対応できなくなっている。これを克服するために、社会福祉法人に対しても厚労省から思い切った通知がされている。〇本来業務でないけれども、受け止めてほしいんじゃないのという主旨。」



熱心なグループワークと発表
「情報共有が大事だね」と。



野崎伸一氏

グループごとの話し合いでは、まずは法人同士が顔を合わせ情報共有する機会をつくること、そして行政や社協もしっかりと手をなげ伴走支援する必要性を確認しました。
また、具体的には、送迎車の活用や災害時の助け合いなどの意見も出されました。

れば、勤務内でもやっていい。このような通知を活用すれば、制度の隙間への対応も可能になる。
ターゲットを絞ってやっていくのではなく、もう少し一般の人が参加しやすいように入り口を拡げてやっていく。もはや、福祉だけの話ではないことを理解することが大切である。」

※懐かしい未来とは、これまで古い価値観として捨ててきたものの中に、実はこれからの暮らしに必要な大切なものがあつたのではないかと気づきから使われはじめた言葉です。



うまくいき過ぎた重層物語 SEASON 4 - 2



11月号に続き、『プレゼント』と題して重層物語をお届けします。地域共生社会を理解する助けになれば幸いです。どうぞお楽しみください。

前回のあらすじ

地域共生社会をキレイごとだとする律子。それは、隣に住む一人の老人（二郎）でさえ受け入れられぬもどかしさからくるものであった。ある日、悩みを膨らませる律子に追い打ちをかけるように、事件は起こった。

終業の時刻となり律子は帰り支度を急いでいた。小学校が終わると、娘は律子が帰るまで一人で留守番となる。外がまだ明るい季節には、二郎が庭仕事をしながら、娘を気にかけてくれていた。しかし、師走ともなれば薄暗く寒くなるものだから、いつからか娘は二郎宅にお邪魔して待つようになった。もちろん、学童に通わせるつもりもあつたが、幼少期から親の勝手に付き合せてしまっている後ろめたさも手伝って、二郎と遊びたい娘の気まます許したのだ。

十月が終わる頃から二郎の認知症が進行し、それに伴って律子の不安も身勝手に膨らんでいった。車を走らせながら、二郎宅で留守番している娘のことが気になって仕方がない。期限の切れたおやつを食べさせられてはいないだろうか、二郎の大声で怖い思いをしないだろうか、悪いことばかりが浮かんでくる。

自宅に車を止め、荷物を車に残したまま隣の二郎宅へ向かう。

「すみません、今帰りました」

建付けの悪い玄関戸を勢いよく引くと、娘が上着を振り回し、大声で叫びながら、飛びついてきた。なにごとか顔を見ると、暗がりから二郎らしき影が近づいてくる。よく見ると二郎の手には包丁があつた。叫ぶより先に身体の方が動いた。そのまま娘を抱きかかえて自宅に停めてある車まで走り、乗り込んでエンジンをかけた。娘が助手席で何か言っているがそれどころではない。路地に出て二郎が追ってこないことをバックミラーで確認し、家から三キロ程の駐在所まで走らせた。

幸いにも駐在所に巡査はおり、挨拶もしないままに、「認知症高齢者に娘が襲われた」と訴え、怖いので状況を見に行つてほしいと頼んだ。巡査は、律子の真剣な様子に気圧されながら、「反町のじいさんの家やな？」とだけ確認し、パトカーで出ていった。

少し鎮まった律子は、車で待たせていた娘を呼び寄せ、駐在所の中で待つことにした。

娘のはみ出したシャツを直し、石油ストーブの前に椅子をやって座らせると、むわっと臭いがした。

「カメムシ臭いんだけど」

娘に問うと、車中からずっとそう言っているのに聞いてくれなかったと怒つた。ごめんと言って仕切り直すと、途切れ途切れの言葉で話し出した。娘の言葉がつかがっていくにつれて、顔が青ざめていくのを感じた。

娘の話ではこうだ。いつものように二郎宅に邪魔させてもらって、窓から見える柿を食べたいと言つたらしい。渋柿だからと、二郎は諭したようだが、「しぶがき」という響きは、娘の好奇心をさらにくすぐつたらしい。ついには、暗い中で脚立に登つて柿をもいでもらい、台所で皮をむいてもらっているのを居間のコタツで待つていたそう。

その時、居間の電気照明の周りを飛び回っていたカメムシが、パンとぶつかつて、娘のうなじに落ちた。驚いて払おうとしたら、服の中に滑り入つていった。もはやパニックとなつた娘は、着ていた上着を脱いで振り回し、大騒ぎしていたら、ママが迎えに来た。律子は地べたにへたり込んだ。

「ねえママ、なんで警察に来たの？」

娘は真つ直ぐな瞳で聞いてきた。律子は返事もせず目を逸らした。

娘は律子の携帯で気に入った動画をリプレイしている。静けさに包まれた所内には、抑揚のないアニメ声だけが小さく響いていた。しばらく呆然としてみると、巡査がレジ袋をぶら下げて戻ってきた。娘が動画に夢中になっている姿を確認してから、この次第を小声で報告すると、巡査は「なるほど」と、納得した様子だった。

二郎からすれば、急に娘が大騒ぎしたもんで、怪我をしたのかと大層心配していたそう。巡査が何をどう聞いても、そればかりを言うものだから、痺れを切らして、「お嬢ちゃんに何かしたの？」と問うと、「わしが、わしが何かしたんやろか」とさらにうろたえて、もう話にならなかつたらしい。

「勘違いでよかつたけど、反町のじいさんには悪いことしちゃつたな」

そう言つて、二郎から受け取つたというレジ袋を手渡された。

帰り道の車内で、娘は押し黙つたまま窓を半分開けて夜の冷気にあたつていた。早速、二郎に詫言ひようとも思つたが、もう寝ているに違いないと決め込んで先延ばしにした。車を降りる時にもカメムシの臭いは残っていた。

普段なら、「一緒じゃないと寝ない」とこねる娘は、ご飯を食べずにさつさと風呂に入り、歯を磨き、トイレを済ませ、二階の寝室にひとり上がつていった。気がついて呼びとめると、階段の踊り場で足を止めて、「ママきらい」と小さく言った。よせばいいのに「明日から学重だからね」と追い立てた。

一瞬ふり返つた娘の目には、光るものがあつた。

「自立、成長、競争・・・」

仕事に没頭し、賞レースのような日々を過ごしていた頃、母から頻りに電話がかかつてきた時期がある。とりとめのない話を長々と続ける母に、「忙しいんだから要件だけにして」と突っぱねた。

「ごめんさいねえ」

耳元でささやかれたみたいに、弱々しい声のトーンまでくつきりと思ひ出した。熟れたのに甘くもない柿が、いじらしい。

冬休みを前に娘は学校に行かなくなり、二郎は肺炎をこじらせて入院した。

(作・中井 浩喜)